

(タイトル背景は、下述のマナムニパヤーでの壁面装飾の翡翠)

『やまざと』 昨月号までに続いて、今回も、近年の外国での写真を紹介させていただきます。

その11-1：微笑みと安らぎ・翡翠と黄金の国、ビルマ(ミャンマー) ～まず、古くからの都市ほか

2017年の春には、ビルマ（1989年に英語国名はミャンマーに）に行きました。（株）西遊旅行のツアーですが、ツアーでは廻らない地を見るために先行して現地での合流です。まず、ツアーには含まれないヤンゴン(旧称・ラングーン)などを中心にご紹介を。英国統治時代が偲ばれる市街です。



英国時代のラングーン駅は、実に見事なものです。交通の主役は今や道路と空路なので、駅ホームでは自炊や同行の犬も。ふと見ますと、「回送」「ワマン」表示の日本製中古車輻(下左)にはビックリ。



熱心な仏教徒の国でもあり、寺院や仏塔(パゴダ)は、黄金と翡翠で飾られます。下左は緑豊かなヤンゴンではほぼどこからでも見える、黄金に輝くシュエダゴンパゴダ。下は、マンダレーのマナムニ(仏陀座像)パヤー(寺)で、奥には金箔に包まれた仏像。下右は、お寺での<sup>とくどえ</sup>得度會の人達。



ビルマ北方の山岳地帯は、世界でも珍しい<sup>ひすい</sup>翡翠の産地で、各種の宝石も産します。右の写真のように加工して、販売されています。

ビルマの女性には、小さい頃から、「タナカ」の樹木粉末を、化粧を兼ねた日焼け止めとして、<sup>ほお</sup>頬に塗る習慣があります。次ページ写真のように、塗らない人から、木の葉の丁寧な模様まで、様々です。一方では、その右の女学生さん達のように、タナカ離れも進んでいます。



(ルビー・サファイア・エメラルド・月長石の加工品と、翡翠の腕輪)



(「タナカ」の人達。上写真の中央はパオ族で、ほか総てはビルマ族の女性。)

前ページは、植民地時代に栄えたラングーン(現・ヤンゴン)でしたが、続いて、ビルマ最後の王朝のあったマンダレーについてもご紹介を。なお、遺蹟や街の位置関係の理解のために、右図をご覧ください。マンダレーは、豊かな緑の中の静かな都市です。冬に避寒のために訪れる欧米の人たち向けの瀟洒なホテルもあり、立派な市場も。



(ツアーの行程図:(株)西遊旅行提供。)



下は、ビルマ最後の王朝となった、マンダレーのコウバン朝王宮と、シェナンドウ寺(僧院)を。ともに木材をふんだんに使った建築物で、後者の内外を飾る精緻な彫刻は、チーク材を使ったもの。



ビルマの古い街では、朝早くに出歩いておられますと、托鉢僧の集団によく出逢います。マンダレー近郊で、僧侶 1000 人と言われるマハーガンダーヨン寺では、10 時頃からのそれが有名で、今や観光地化です。むろん、僧への寄進の人達も大勢が参集しておられます。托鉢への寄進だけでは、食事がまかなえませんが、厨房も(下の中写真)また、大変そう。

3月、日毎に暑くなり始める乾期のただ中で、連日の晴天です。下は、マンダレー丘と言われる山で、トラックの荷台で登頂して更にエスカレータで。夕涼みを兼ねた、のどかな日没でした。

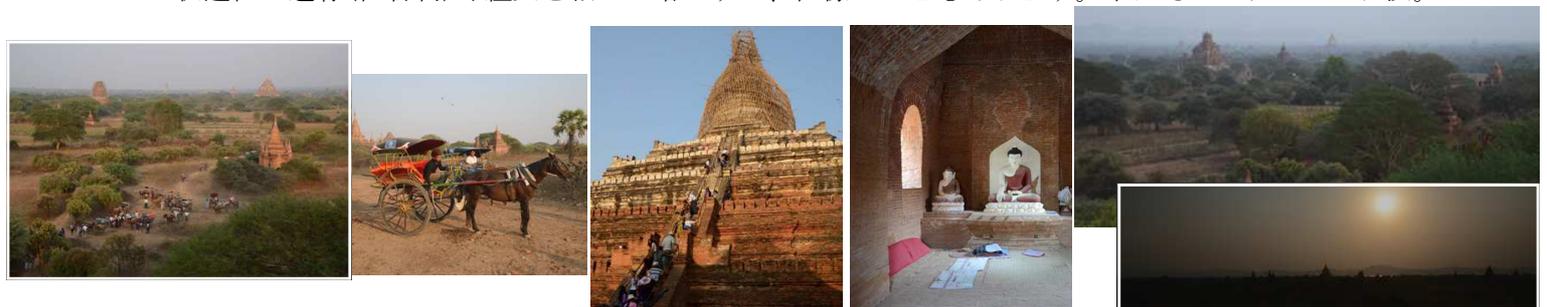


その11-2:ビルマ(ミャンマー)の中部 ~ 前ページ「行程図」の中程、古都パガン周辺

ビルマは人口の9割程が仏教徒ですが、古くからの精霊信仰もまた併存しています。ナツ<sup>ナツ</sup>信仰の対象は、自然に宿るもののほか、下写真のホッパ山(777段の階段を徒歩で：降りも大変)で見ると、生けるが如くの人姿で神格化したものもあります。厄除けや現世の幸せが祈られています。



パガンは、9世紀のビルマ最初の統一王朝の地です。下の左と右は、5層のテラスのあるシュエ<sup>パゴダ</sup>サイド仏塔(中写真)からの俯瞰です。広大な遺跡群ですので、馬車か車で廻ります。パゴダとは、釈迦の遺骨(仏舎利)や経文を納めた塔ですが、仏像のこともあります。下はそのテラスでの日没。



下は、11世紀のシュエージーゴン(「黄金に囲まれた」の意)パゴダ。大勢の参詣者で賑やかです。回廊の一角に据えられた岩面に小さな窪みがあり、その水面に写る仏塔先端を見た人には幸せが宿る、との伝承があります。本稿でそれをご覧の皆様にも、きっと幸せが。下右は、ほぼ同時期建設のアーナンダ寺で、本堂中央には巨大な4体の仏像が四方を向いています。



ビルマは、大東亜戦争末期の昭和19年春に、日本軍が英国植民地のインド北東部への進攻を目指したインパール作戦の発源地ですが、兵站を無視した杜撰な作戦によって、雨期と重なったその退却路が白骨街道といわれたように、作戦参加の約10万の日本兵のうち約7万人が戦病死・餓死しました。下左は、タビニュー寺(パガンでは一番高い65m)の脇にある日本軍第33師団の慰霊碑。

右側3枚は伝統的な操り人形劇です。人形師はサービス旺盛で、各客席を廻ってのお布施集めも。



その11-3:ビルマの中南部 ～ インレー湖周辺と、「行程図」中では下のゴールデンロックなど

ビルマ東部のシャン高原にあるインレー湖です。湖岸の一带では小舟での移動が普通です。左は、湖中で出逢った漁師さんのご愛敬。続けて、宿泊コテージでの夜明けの眺めと、同宿だった金満中国有閑ご婦人方からの依頼撮影。小生、写真家と間違われたようでしたが、ホーズの取り方も仲々の。



小舟で行く、湖畔のファンドゥパゴダと、その堂内には金のお団子に見える5体の御本尊。参詣者が金箔を貼り続けた結果で、以前は下の白黒写真のように仏様の形が判ったそうです。金箔貼りに壇上に登れるのは、ここでは、外国からの観光客と言えども、男性のみです。

右は、この一帯で盛んな、蓮の茎からの糸(藕絲)を交えた織物(日本の伝統工芸にもあり)の工房で。



ビルマ最後のご紹介は、大手旅行社のツアーでも多分含まれる、チャイティーヨ山のパゴダ(ゴールデンロック)へ。遠くに、山の端から転げ落ちそうな岩と人だかりが見えてきます。大勢の人が岩を押しています。よく見ると隙間が見えて、ゆっくりと揺れていますが、不思議なことに決して落ちません。巡礼者が貼る金箔に覆われていますが、ここでも女性は近寄れずに、少し離れた祭壇で。

このあと、ツアー団から離れて、タイ国へ行きました。右はビルマの国内航空と、バンコクへのタイ国際航空での、ともに、魅惑的な乗務員さん達です。



以前からタイへ行くごとに、大東亜戦争末期に日本軍がタイからビルマへの物資運搬のために、連合軍捕虜と現地雇用者動員で建設を進めていた泰緬鉄道(たいめん)を、奥へと辿っていました。ついに、この年に、ビルマ国境の三仏塔峠(Three Pagodas Pass)に到達しました。次号ではそのご紹介を。

ここで、念のためのご説明を： 拙稿ページは、全部を筆者が作ったものです。前年号からは、投稿は個人4ページ・支部などは8ページ以内、写真は1ページにつき2枚まで(その挿入編集に手間(経費)を要す故か?)とお定めになりました。じつは以前からですが、編集経費低減に少しは資するようにと、拙稿は上述のように自身で編集してPDFで提出しております。それゆえに、規定とは関わりなく写真がたくさん掲出のページとさせて頂いておまして、製本の際に左右バランスが崩れるかも知れませんが、それは筆者の責に帰すべきものです。

(一連の稿は、KUWV-OB会のHP中、「会報Web版」からご覧頂きますと、カラーでの閲覧が可能です。)

HP 上でご覧頂く場合は、拡大してご覧下さい。拙稿挿入写真はA3でご覧を前提の解像度です。